

報告者

ステイブリン・トレンソン

(早稲田大学国際学術院・准教授)

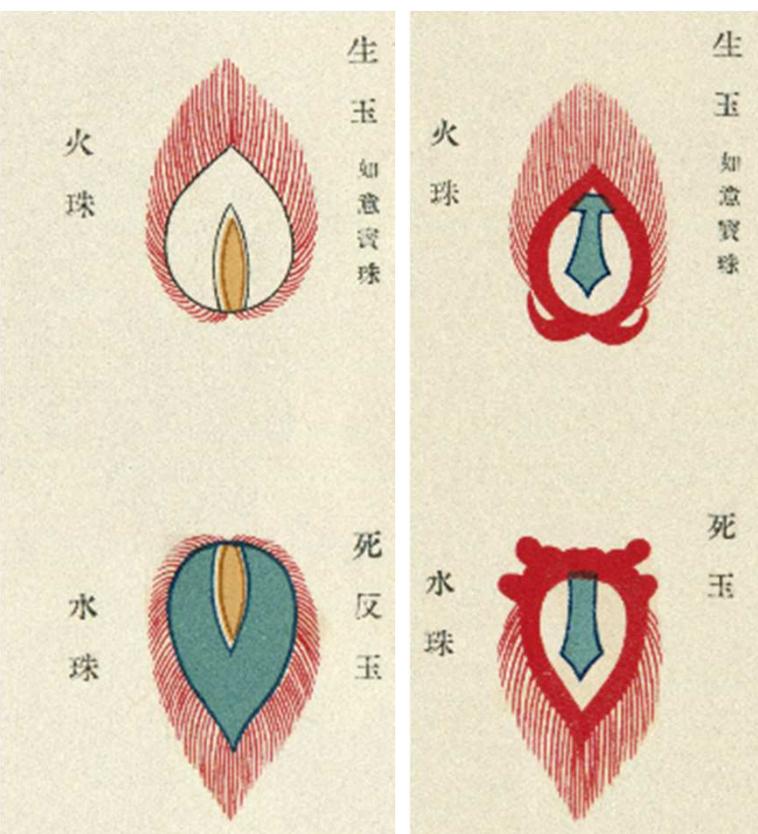
米・舍利・宝珠

中世日本の密教における

米粒のエージェンシーとネットワーク

コメンテーター 高橋悠介 (法政大学国際日本学研究所客員所員・慶應義塾大学斯道文庫准教授)

司会 小口雅史 (法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)



出典:
(左)『十種神宝図』都本(長谷川宝秀『慈雲尊者全集』十、高貴寺、1924年、776頁)
(右)『十種神宝図』山本(長谷川宝秀『慈雲尊者全集』十、高貴寺、1924年、785頁)

●報告の概要●

中世日本の仏教では、米または粃をめぐってほかのアジア仏教の地域に見当たらない独特な信仰が流布されていた。インドまたは中国の仏教においては米が仏舍利と結びつけられていて、宗教的に重要な意義を持っていたが、仏典などを通じて日本にも伝わったこの信仰は、興味深い発展を遂げていた。たとえば、中世日本の密教では粃が木造の小塔に納入され、あるいは舍利法において舍利に代わって本尊として据えられていた。この場合の米の宗教的使用は仏典の教義に基づいていて、大陸の仏教にルーツを持っている現象であるが、その新規的作法からは、中世日本における米への注意の高まりがうかがえる。さらに、同じ舍利・米の信仰に踏襲しつつも、中世日本では仏典に還元できない奇妙な宗教形態が見られる。その中では、飯を構成要素の一つとする“仏供塔”、鉢に飯を盛って舍利と瞑想する“飯鉢観”、あるいは“淫粃”、つまり、淫をなして衆生の生命を存続させる粃の概念、または筆者が仮に“粃珠”と呼びたい中世神道の神宝が特に注目される。本報告では、以上の日本独特の米・舍利信仰を解明した上、それぞれの信仰がおそらく孤立しているのではなく、一つの思想的体系を形成していたと論じる。そして、各自の信仰のルーツを大陸の仏教に辿りつけられても、本報告で論じる思想的体系そのものが日本宗教固有のものとして評価できると提示したい。また、本報告では米の“エージェンシー”にも注意する。それは米または粃が“アクター”として、つまり、複雑な観念的ネットワークの一つのノードとして多くの中世日本特有の信仰を生み出す力を秘めるものであるとともに、ほかのノード(観念)をも含有していたものであったという発想である。そのような“米”は、正に中世日本宗教の特殊性を代表する“玉”の一つであると言えよう。

2018年11月7日(水) 17時から19時

○会場
法政大学市ヶ谷キャンパス
ボアソナード・タワー19階 D会議室

○参加費
無料(どなたでも参加可能です)

○参加申込方法
電子メールまたはお電話で事前に参加の申込みをお願いいたします。電子メールの場合、氏名、所属、電話番号、電子メールアドレスを明記の上、法政大学国際日本学研究所までご連絡ください。お送りいただきました個人情報、参加申込受付以外の目的には使用いたしません。

申込先: nihon@hosei.ac.jp

法政大学国際日本学研究所公開研究会

新しい「国際日本学」を目指して(5)

